



# Voice

## ヴォイス 第3号

大分県立芸術文化短期大学 サービスラーニング公式新聞  
第3号／発行2010年7月20日

## 地球を感じよう！ 学生ECOフェスタを初開催！

Photo／キャンドルナイト

### 学生発の地域イベント 大分市、商店街とタイアップ

本学の学生らが運営の中心になった「2010／府内☆学生ECOフェスタ」が6月19日、大分市の府内五番街商店街で行われた。国連環境デー(5日)や夏至(21日)がある環境月間に開催される「学生発の地域イベント」だ。「地球を感じよう！」を基本コンセプトに、大分市環境対策課や府内五番街商店街とタイアップして、地球環境の保護を訴えるとともに、新しい形の地域おこしを目指した。

【主催】「府内☆学生ECOフェスタ」実行委(実行委員長・赤池すすか、情報コミュニケーション学科2年)  
／【共催】大分県立芸術文化短期大学、キャンパスカフェ編集部、大分市、府内五番街商店街街振興組合、大分合同新聞社／【後援】大分市教育委員会。

大分合同新聞は、フェスタの様態を次のように伝えた。

県内の学生が企画・運営を手掛けた、初の地域イベント「2010府内☆学生ECO(エコ)フェスタ」が19日、大分市中心部の府内五番街商店街であった。

県立芸術文化短期大、大分大の学生を中心とする同フェスタ実行委員会(赤池すすか委員長)の主催で、6月の環境月間にちなみ「エコ」を柱としたイベント。県内の学生約200人がスタッフとして参加した。

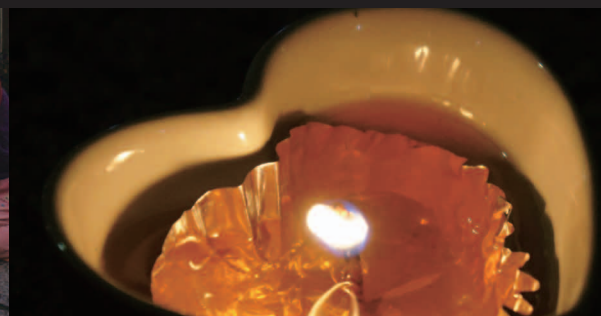
情報発信、環境、音楽・映像、LOHAS(ロハス＝生活と環境をともに大事にする生活)といったテーマごとに「ゾーン」が設けられ、地球環境の保護、地域活性化を考える行事が行われた。

省エネ運動「キャンドルナイトチャレンジ」として、商店街約400メートルにわたって廃油で作った約3千個のろうそくを設置。午後7時半すぎ、一斉に火がともされると、キャンドルは小さな光の列となり、商店街は優しい雰囲気包まれた。(6月20日朝刊)

### 大分市環境対策課より、 感謝メッセージ。

「府内☆学生エコフェスタ」は、大分市内の大学生や商店街の皆さんと市役所がアイデアを出し合い、企画・実現されました。初めての試みにもかかわらず、学生の皆さんの柔軟な発想や高い機動力、商店街の皆さんの温かいご支援により、大成功を収めることができました。学生の皆さんは、今回の経験をぜひ今後の糧にしてください。私もお互いが学びあえるような新しい発想の事業を展開して行きたいと考えています。関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

(環境保全係主事・三ノ宮耕介)



# 2010 府内★学生 ECOフェスタ

地球を感じよう! Feel the Earth!



## スタッフの奮闘記

「府内★学生ECOフェスタ」の運営の中心になったのは、もちろん学生たちだ。2年生だけでなく、入学間もない1年生たちも率先して参加した。

## ★ サービスラーニング 「白くまラジオ」

白くまラジオのスタッフとして参加し、「あしなが学生募金」のパーソナリティーをしました。あしなが学生募金のゲストは芸短生ではなかったので、当日まで1度も打ち合わせができず、本番1時間前にざっと打ち合わせをただけで、本番に挑みました。ラジオのパーソナリティーをするのが初めてで、とても緊張しました。打ち合わせの時より自然に出来たので、個人的には満足でした。途中で間違えたりしたことが反省点です。終わった時にはすごく達成感があって、充実していました。

(1年・多田彩乃)



## ★ 「十三夜」で司会を担当

府内フォーク村「十三夜」で、チラシ配り・司会・会場設営といった仕事を行った。なかでも、司会という仕事は今まで経験したことがほとんどなく、うまく話せるか少し不安だった。本番は緊張したけど、できるだけお客さんの方を見て笑顔で話すよう心掛けた。1日を振り返って、私にはまだまだコミュニケーション能力が足りないと感じた。先輩方のてきぱきとした働きを見て、カッコいいと思ったし、私自身も何かの活動で中心となって働ける存在になりたいと思った。今回感じたことや考えたこと、経験したことをこれから生かしていきたい。

(1年・税田真知子)



## ★ 大分市「環境展」で



苗木を配った時、もらってくれない人もたくさんおり、残念に思った。苗木をもらってくれた人が庭に植えることで、環境に優しい活動を多くの人が行ってくれることを考えると、とてもうれしい気持ちになった。これをきっかけに、今まで環境に関心をもっていなかった人も、興味をもってほしいと感じた。

(1年・山村葉織)

## ★ キャンドルナイト コンサートを司会

ネパールからの留学生MANIくんと、コンサートの司会を担当した。演奏を楽しみ、頭の中で演奏後のことを考えた。「和太鼓サークルに、大きな声で拍手をお願いします」。その瞬間、観客は

爆笑した。近くにいた狩谷先生が「大きな声で拍手はできないな」と苦笑していた。私も自分の言い間違いなのに、つられて笑った。「府内★学生ECOフェスタ」は、忘れられないものになるだろう。学外の本格的な活動は初めてだった。学生が街を盛り上げたという達成感があり、うれしかった。この大学生活で多くの活動をしてみたい。

(1年・櫻井奈菜子)



## ★ 「日本一小さな花火大会」

会場では参加者が数カ所におかれたキャンドルに集まり、線香花火を楽しんだ。ひとつのキャンドルを近くにいた人同士でうまく一緒に使っていた。地球も同じことである。これから先、どうすれば共に生きていけるのか。そのことを一度考えてみなければならない。

(1年・三浦晃子)



## 映画「earth」を見て

英国BBC制作の映画「earth」は、学生たちに強い感動を与えた。

(6月14日、プレイベントとして上映)

### □ 想像以上のことが

(1年・大山純子)

私の地元である奄美大島では、環境破壊や地球温暖化の影響により多くの自然や動物が絶滅しつつある。実際に、地球環境に詳しい人たちに話を伺ったり、生態調査や自然観察に行ったりして環境破壊で何が起きているのかは知っているつもりだった。しかし、今回「earth」を見て、自分が知っていたことはごく一部であり、考えていた以上のことがこの地球上で起きていたことが分かった。

### □ まだ間に合う

(1年・西田加奈子)

映画の最後に「今ならまだ間に合う」という言葉があった。この言葉に私は、とても希望を与えられた。私の孫、ひ孫、その先の代にまで美しい地球を受け渡したい。

### □ 2つのこと

(1年・佐藤祐美子)

映画を見て、2つのことを考えさせられました。1つめは「動物の中でも人間は特別か」ということです。2つめは「人間は他の動物や自然と共生することができるのか」ということです。人間の環境破壊によって絶滅種が増えていくようでは、共生しているとは言えません。

### □ 生物多様性

(1年・石田穂波)

私が映画を見てまず浮かんだ言葉は「生物多様性」だ。この言葉は、地球環境問題に注目が集まっている反面、意外と認識が少ないということで話題になった。地球上には遺伝子、種、生態系のレベルで多くの生物種が存在するという意味だ。生物多様性の記事を高校生のころ読んだが、意味が分かるようで分からなかった。だが今回の映画を通して、この言葉の持つ意味が具体的に示されたと感じている。つまり、私の中での認識が少し理解へと深まったということだ。

### □ 悲惨な北極熊

(1年・森奈帆)

印象に残っている場面は、北極熊が出てくるところだ。生活の基盤となる氷がなくなってきていて、獲物がとれず餓死寸前だという。実際に餌がなくさまよう熊を見て、その事態を目の当たりにした。熊はセイウチに襲い掛かり、結局、獲物を捕えることができなかった。



# 「ECOフェスタ」に参加して

「府内☆学生ECOフェスタ」(6月19日、府内五番街一帯)には、情報コミュニケーション学科を中心にした本学学生がスタッフとして多数参加した。写真も学生作品である。



## ★ 最高の誕生日

6月19日。この日「ECOフェスタ」があり、私はダンスサークルとして、イベントに参加した。この日が初舞台である。それともう一つ、この日は私の誕生日だった。みんなの目線を浴びる中で踊る。きっと頭が真っ白になって上手く踊れないだろうと思っていたけど、それは違った。自分でもわかるぐらいの満面の笑みで楽しく踊れたのだ。最高の誕生日になったと心の底から思っている。



(1年・佐嶋綾香)

## ★ 私の決意

7月23日、鶴崎で行われるSAEMON23というお祭りにスタッフとして参加する。ゴミを減らす目的でみなさんに少しでもecoの意識を持ってもらうために活動をする。ゴミ問題も地球に全く関係ないことではない。ほんの少し努力するだけで、生きられる動物がいるなら手を貸したい。どの生き物もなんでもない理由で死んではならないのだ。

(1年・稗田結菜)

## ★ 次は湯布院映画祭

「ECOフェスタ」成功に向けて、どの学生も一生懸命に頑張っている姿を見て、すごく刺激をもらった。私は今回、観客側として参加したが、これから夏休みにかけて行われる七夕祭、湯布院映画祭では実行委員として参加するつもりだ。イベントの成功に向けて頑張っていると思う。

(1年・川上真央)

## ★ ヒマラヤの雪

地球にいる人間や動物、全ての植物の生活が本当に難しくなっています。私は自分の国ネパールも、このことについて考えなければいけないと思います。国の北側にあるヒマラヤも問題の一つです。温暖化のせいで、ヒマラヤにある雪がどんどん溶けています。この状態がこのままになっていけば、その地域の人間とすべての動植物が大変になるとおもいます。

(1年・GYAWALI MANI)

## ★ 何かを始めたい

世界では過酷な自然環境の中で、必死に生活をしている人間もいる。私たちはその存在を知りながら、何か行動を起こそうとしてもいない。今こそ、限りある自然を守るために、何か動き始めるべきではないだろうか。

(1年・藤原はるか)

## ゾーン責任者の言葉

### 日本一小さな花火大会

担当者が決まっていなかったから、という理由で「日本一小さな花火大会」の責任者を引き受けた。一つのイベントの責任者になるのは、初めてだった。『君のところが一番大変だ』と先生から言われた時、初めて事の重大さに気がついた。スタッフ募集で来てくれた1年生。イベントの打ち合わせで、私は何をして良いのか、正直わからなかった。指示することの難しさに直面した瞬間だった。夢に出てくるほど、46時中イベントの事が頭から離れなかった。曖昧な指示にもかかわらず、臨機応変に対応してくれたスタッフに、心から感謝している。皆の楽しそうな姿を見て、何とも言えない達成感で満たされた。

(2年・井上千嘉)

### 府内フォーク村「十三夜」

府内フォーク村「十三夜」での「映像・音楽ゾーン」を担当した。たくさんのお客さんに楽しんでもらうためには、どうしたらいいだろうか。時間帯やイベントの構成など検討する日々が続いた。当日はK-POPS、イタリア、スペインの講座や、プロによるフラメンコ、大分大学バンドコンサートを行い、「十三夜」は盛り上がりを見せた。スタッフは外でのチラシ配り、司会、設営など仕事をこなし、お客さん呼び込み楽しませた。イベント終了後、スタッフ全員が達成感にあふれた。お互いに意見を出し合い、よりよい「十三夜」イベントを作ることができたと実感した。

(2年・森本絵美莉、佐藤明日美)



和太鼓クラブ演奏



ライブバル写真展



Kポップス講座



高橋先生のギターソロ



ジャグリングサークル



AED講習会

## 「府内探検隊」が行く!

大分市の中心部府内。懐かしさが感じられる地名だ。豊後国の国府が置かれた大友宗麟の時代は、南蛮交易のメッカだった。府内城址もある。6月19日、府内町一帯で開かれる「府内☆学生ECOフェスタ」。まず街を知らなくては、と府内探検に繰り出した。(文は2年赤池すずか、写真は同井上千嘉・山元泰幸)

朝10時、府内町のサンサン通り。自転車屋さんから口ひげの男性が姿を現した。探検隊の案内役・児玉憲明さん(49)だ。大分の「まち歩き名人」。一緒に歩き始めると、次々と声がかかる。

県庁や市役所が近いからなのだろうか。はんこ屋が多いことに気づいた。「安部印刷」もその一つだ。2代目店長の安部嘉彦さん(47)。昔は安部さんのように、ものづくりの人材が府内には多かったという。しかし職人は減り、その年齢も高くなった。(中略)

「私が子供のころ、店の前の通りは馬車道だったんだよ。田崎洋酒店の店主・田崎一彦さん(64)が懐かしそうに語る。終戦の年に生まれた田崎さんは、空襲で焼け野原になった大分市街地が、時代とともに変わっていく様子を見てきた。ずいぶん風景も変わった。ここ数年で老舗はバタバタとなくなつた。学生がいて、街が活気づくからとどんどん出てきてほしい」

児玉さん曰く、「府内町は博多の大名のような所だよ。府内5番街は「若松通り」と呼ばれ、若者に人気の街だった。府内の商店街には老舗と新しい店舗が混在する。そこが魅力だ」と私たちは思った。(中略)

正午。老舗トキハのサイレンが鳴る。市街地にしみついた音だ。「バルコ」は撤収しても「トキハ」は健在だ。府内には面白いものがたくさんある。探しに出かけてみてはいかがだろうか。毎日新聞大分版「キャンパスカフェ」3月号掲載。



## ECOフェスタ群像

「府内☆学生ECOフェスタ」には学生だけでなく、大分市市職員、商店街幹部、本学教員など多くの人が協力した。フェスタ群像の中から紹介する。



### 「市民の輪を」

(写真:前列左)

大分市環境対策課主事:三ノ宮 耕介さん(32)

学生と行政、商店街が手を携えて実施したECOフェスタ。大分市の実務担当者が三ノ宮さんだ。「世界でいま、最も注目されている環境問題。その分野で仕事ができ、やりがい大きい」と語る。学生たちとの初のコラボレーション企画。「地球温暖化について関心を持つ契機にしてほしい。学生やお年寄りを含めた市民の輪を広げたい」と語った。

(1年・日高かずみ)

### 「参加しなければ損」

(写真:後列右から2人目)

環境サークル長:国際文化学科2年 小田 麻衣子さん(19)

「大学でしか出来ないことをやりたい。自分からボランティアをやりたい」と思い、環境サークルに入った。地域のボランティア活動に参加したり、大学内に植樹をしたりするなどの活動をしている。長崎県出身。故郷は自然があふれる場所だった。「大分市が地域をあげて環境や自然への取り組みを行っていることに驚いた」という。昨年初めてキャンドルナイトに参加した。「最初は見て楽しむだけと思っていたけど、廃油でキャンドルを作ってみて、環境のことを考え始めた。卒業してもキャンドルナイトに参加したい、参加しなければ損だ。」

(1年・中川響)

### 「イタリアの歌」

ヤンノッティ・ルイジさん(53)

芸短大イタリア語講師。19日、府内フォーク村「十三夜」でイタリアの歌を披露した。ナポリ出身。19年前にカトリック宣教師として来日。スローフード運動の発祥地イタリアのエコについて語り、ギター片手に「サンタルチア」「オー・ソレ・ミオ」など、日本でも馴染みのあるイタリア民謡を歌った。

(1年・青山ひかる)



### 「商店街の活性化のために」

府内五番街商店街振興組合理事長:牧通さん(59)

「五番街商店街のすばらしい街並みもぜひ見てほしい」商店街としても、街並み緑化や風力発電に取り組んできた。牧さんが経営するお茶の老舗「若竹園」は、エコパックの導入などにも努めている。「若い人たちがどんどん盛り上げてほしい。応援しますよ」

(1年・中村優伽)



## ★「府内☆学生ECOフェスタ」お礼のあいさつ 全員に拍手と感謝を



2010年3月下旬、大分県内の大学生が「地域を盛り上げたい」と立ちあがった。昨年夏の大大分市主催のキャンドルナイトを大学生新聞「キャンパスカフェ」記者として取材し、イベントのあり方に疑問を呈したことがきっかけとなった。

市民参加をうたっているながらも、実際、準備に参加している市民はごくわずかだった。「地域と環境のために、私たちにできることはないか」。その気持ちから「府内☆学生ECOフェスタ」は始まったのだ。

大分市では初めてになる大規模な学生発イベントだ。実行委員長に任命された私の心は、不安一色だった。大分市や府内五番街商店街と共催となる。学園祭などとは全く違うのだ。何度も会議を重ね、互いにコミュニケーションを取り合った。

6月19日のイベント当日、雨が心配されたが何とか持ちこたえ、予定通りの開催となった。

本番では少なからぬ課題も見つかったが、「若者が地域を盛り上げるきっかけ」になったことは明らかだろう。この開催を機に、市民みんなが環境保護に対する意識を強めてほしい。若者が地域を盛り上げようと奮闘していることを知ってほしいと思う。

このイベントは、私たちひとりひとりの力では達成することはできなかった。たくさんの方々が成功へと導いた。多くの学生ならびに関係者の皆様に、感謝の気持ちを述べたい。そして拍手を送りたい。ありがとうございました。

(実行委員長／2年・赤池すずか)



### この記事から始まった

「キャンドルナイト」というイベント自体は、市民によく浸透している。府内五番街のキャンドルナイトには、家族連れからお年寄り、学生まで幅広い年代が参加した。しかし、課題も少なくない。一つ目は準備から片づけまで、すべて市役所やNPOなどの運営側が行っていたことだ。二つ目は不参加の店舗もあったこと。三つ目は間違った理解をする人もいたことだ。(中略)

エコ活動は一朝一夕とはいかない。キャンドルナイト自体も、CO2排出量をその日のうちにどれだけ減らすかが問題ではない。どれだけの人にエコ活動を考えてもらうかという啓発イベントのひとつだ。市民が運営し参加するキャンドルナイトの実現に向け、私たちがすべきことは何なのだろうか。

(齋藤兼信、赤池すずか)＝毎日新聞大分版「キャンパスカフェ」09年7月号



## あしなが学生募金に参加しました

土曜日はあしなが育英会職員の松井佳さんが先頭に立った。「私が大学進学できたのはあしながの奨学金と母の支えがあったからです。中学2年で父を亡くし、女一つで自分を育てくれた母に感謝しています」と涙ぐみながら、呼びかけを続けた。その姿は松井さんの活動に対する熱意の表れであり、居合わせた人々の心に届いたと思う。



日曜日はあしなが育英会代表の石橋弘基さんが先頭に立った。「自分のために一日中懸命に働く母を見て進学を諦めていたが、母の言葉だった。今まで不自由なく大学進学できたことが当たり前のように感じていたが、それは違うのだと思い知ることができた。夢を持つ遺児が将来への道をどのように切り開いていくのがよいか、一緒に考えてみたいという気持ちが生まれた。

(1年・太田有里紗)

## ★「地域社会特講」から 五番街商店街の街づくり

6月15日の芸短大「地域社会特講」は、大分市環境対策課の三ノ宮耕介主事と、府内五番街商店街振興組合の林田文夫副理事長(写真)を講師に迎えた。19日の「府内☆学生ECOフェスタ」の強力な支援者。本番を4日後に控えて、講義にも熱がこもった。三ノ宮さんは「大分市の環境対策」、林田さんは「五番街商店街の街づくり」について話した。



## ★「情報発信特講」から 大分合同新聞のハチミツ

「花が咲いている家にハチミツが入った小さなビンを持って話しかけるんです」。6月7日の「情報発信特講」。大分合同新聞社ストラテジックデザイン室の佐々木稔部長は優しい笑顔で、こう語った。

東京支社に勤務していた時、銀座の街路樹で一匹のミツバチを見つけた。大分に帰った後、大分市の緑化率が9%であることを知った。「緑と花プロジェクト」を立ち上げた。いま、会社ビルの屋上ではミツバチを飼っている。おいしいハチミツがとれる。ハチミツを使って、街の人と協力し商品を作る。ミツバチが人と街を変える「架け橋」になっているのだ。

(1年・天本聖菜)



## ★「情報発信特講」から 府内フォーク村「十三夜」

初代「かくや姫」のメンバーだった森進一郎さんは、メンバーから抜けても、音楽を愛する心は変わらなかった。「音楽に関係のある仕事をしたい」と銀行を早期退職して、「十三夜」を開店した。「生ライブが一番いい」と語る森さん。その魅力を伝えるため、すでに3000回は歌ってきているという。音楽を通じたお客さん同士のコミュニケーションがある。そこが「十三夜」の魅力だ。音楽を愛する気持ちに終点はない。

(1年・櫻井奈菜子)



## 日本赤十字社、学生ボランティア体験会に参加

4月25日に、日本赤十字社大分県支部で行われた学生ボランティア体験会に参加しました。グループごとに分かれ自己紹介をし、非常炊き出し体験をしました。

まず専用の袋に米を量って水と一緒に入れ、口を輪ゴムでしっかり閉じて鍋に入れます。災害時に水がない場合は、お茶やジュースなどで代用し、米の袋を入れる鍋の水も泥水を利用したりするそうです。

私は水の代わりにお茶を試してみましたが、炊きあがりにはご飯に少し色がつく程度で、味はあまり変わりませんでした。

講師の井上さんからは、赤十字の歴史やボランティア活動の意義・心構えについてのお話を聞きました。「ボランティアは相手のことを思わなければ意味がない」「ボランティア家になってはダメ」という言葉が印象的でした。

(1年・三浦見子)



# Voice

大分県立芸術文化短期大学 サービスラーニング公式新聞

〒870-0833 大分市上野丘東1番11号 大分県立芸術文化短期大学  
tel.097-545-0542(代表) / fax.097-545-0543

### 平成22年度 サービスラーニング活動内容

#### 〈前期〉

- あしなが学生募金
- アースデイ
- 上野の森の会
- 園芸サークル
- おおいた親子劇場
- 大分たなばた祭り
- キャンドルナイト
- キャンパスカフェ
- 竹田食育ネット
- 鶴崎サエモン23

- 福祉施設ボランティア
- 湯布院映画祭
- 府内学生ecoフェスタ\*
- \*この他にも新規プログラムがあります。



#### 〈後期〉

- あしなが学生募金
- あしながPウォーク10
- 上野の森アートフェスティバル
- 上野の森の会
- 園芸サークル
- キャンドルナイト
- キャンパスカフェ
- 日韓次世代交流映画祭
- 天瀬グリーンツーリズム研究会
- スタジアムクリーン大作戦
- クリスマス献血キャンペーン
- 国際車イスマラソン